

Biblia

* 心に残るすばらしい本に出会いましたか？

新任の先生方と、学生みなさんに「思い出の本・好きな本」を紹介していただきました。

* あなたの好きな映画は？

映画ビデオとその原作本の紹介をします。

巻頭言

『情報の重み』

図書館長：杉浦太一

もくじ

2 * 私のおすすめ本！
新任の先生方の思い出の本のご紹介
学生の皆さんにも本を紹介していただきました

4 * 図書館委員会委員紹介
4月からメンバーが変りました
似顔絵にもご注目！

6 * 映画とその原作
図書館で所蔵する映画ビデオとその原作本

8 * 図書館から
しーず・図書館員からのメッセージ④
新着図書案内
お知らせ

ある本に次のようなショートストーリーが載っていた。ある主婦の書いた「午後二時の電話」という、見知らぬ老婆からかかってくる電話の話であった。

「621の0000ですか？」「ハイ」と言うと、「ああ、よかった、やっと繋がった！」「どなたですか」と言うと、「老人ホームのおとめばあさんだよ。6歳、2歳、1歳、私の死んだ息子たちの年ですよ。戦争中にもーんな死にました。私の中にあるのは6.2.1だけ」と言うのだ。8月15日、午後二時のことであった。それから午後二時になると頻りに電話が彼女からかかってくるようになる。痴呆がかなり進んでいるようで、きっと「夢の中を歩いているのかもしれない…」と思いながら午後二時に少し気持ちを乗せながら、その主婦は同じ女性として戦争の最中3人のまだ幼い子どもを亡くした老婆の人生を思いやっている、という内容であった。

読者としての私は、この主婦もまたもしかして同様の痛みを抱えているのかもしれない…などかかってに思いながらもなぜか重い荷物を背負い込んだ気がして「おや！」と思った。「8月15日」という記号の重みと「6・2・1」と言う数字に秘めら

れた老婆の人生の重み。この2つの重みに足を取られそうになっている自分がそこにいたのである。そして改めて「情報」にはヒトをよろけさせるような重みがあるということを考えさせられたわけである。たった数百の文字でつぶられた小さな情報が人をよろけさせる大きな力を持っている。その大きな力の源は何か、とえばこの場合、「共有する痛み」や「経験」をあらゆる「記号」や「数字」である。「象徴」と言ってもよいかもしれない。私も終戦の年の生まれだから「8月15日」の記号の重さがよくわかるし、子の親になってみて、物のない時代の子育てがいかに大変で、ましてかわいい盛り3人を相次いでなくした母親の思いはいかばかりかと、切なさで身が縮む思いである。

われわれの言葉で「喜怒哀楽」という感情の共有を「sympathy」というが、sympathyの広がりがおそらく情報に力を与え、受け取るものに「重さ」も含めて様々な「情報の質」を実感させることになるのであろう。軽さー重さ、明るさー暗さ、甘さー辛さ、等等、「情報」は意味以前に質の実感であることにいまさら気づいた次第である。



わたしの好きな作家・本！

A Child's Garden of Verses

R. L. Stevenson 著

英米文化学科：鈴木 順子先生

本棚に、いつも表紙が見えるように立てかけてある詩集がある。ロバート・ルイス・スティーヴンソン Robert Louis Stevenson (1850-1894) の "A Child's Garden of Verses" である。

手のひらほどの小さな薄い本で、草花を手の野に立つ愛らしい少女が淡い水彩で描かれている。扉を開くと、無色のペン画に囲まれて、やさしい英語で書かれた短い詩が、品よく並んでいる。眺めるだけで楽しく、心がなごむ。

漱石は、一番の文章家としてスティーヴンソンを推賞したという。私は、「宝島」と「ジキル博士とハイド氏」ぐらいしか知らないけれど、この詩集には、学生時代にたまたま出会って、一目惚れで好きになってしまった。なかなか手強い英米文学に息切れしそうなき、この詩

集を開けば、春風に吹かれるような心地よさがあった。かつて子供だった自分を見つけるうれしさがあった。

スティーヴンソンは、幼時から病弱で、この詩は結核療養中の南仏で書いたのだが、少しも暗いところがない。父母や乳母に愛されて過ごした幼年期を慈しみ、純なこどもの四季を生き生きと描いている。サン・テクジュペリの「星の王子様」もそうだが、大人が楽しむ本である。

"A Child's Garden of Verses" (1885) : PUFFIN BOOKS

『象が空をⅢ 勉強はそれからだ』

沢木耕太郎

英米文化学科：山賀 尚子先生

- ・象が空を1
夕陽が眼にしみる
 - ・象が空を2
不思議の果実
 - ・象が空を3
勉強はそれからだ
- 1982年から1992年の10年間のエッセイ集です。

読書には、数多くの本を読んで様々なことを知るといふ楽しみ方と、一冊の本を何度も繰り返し読む、という2種類の楽しみ方があるように思います。私が、後者の方法で読書を楽しむ作家の一人に沢木耕太郎さんがいらっしゃいます。

今回は「象が空をⅢ 勉強はそれからだ」をお奨めします。この作品は、彼が大学在学中に何に興味があり、どうやってノンフィクション作家になったのか、また作家になってからの節目、節目をエッセイ風にまとめてあります。卒業を目前にして興味が変わり、経済学部だったのにも関わらず、文学で卒業論

文を書いたこと。企業に就職したが、自分のやりたいことと程遠いことに気づき、入社一日目で辞表を提出したこと。誰もが必ず通る悶々とした時期を、気取らない言葉で的確に表現してくれていたのがこの作品でした。

この本を読んで、人生に無駄なことではないのだ、回り道も良いものだ、ということを知りました。この本を10年後にもう一度読んで、どう感じる人間になっているかを頭の片隅に置きつつ、皆さんに読んでいただきたいと思います。

わたしの好きな作家・本！

伝記小説の魅力

英米文化学科：森 千佳子先生

幼い頃よく読んだ本は、なぜか、「伝記小説」でした。今の小学生達がヒーローものの漫画に夢中なのと同様、私は世界の偉人達の物語に夢とロマンを求めたのかもしれませんが。アムンゼン、マゼラン、ガリレオ・ガリレイ、キュリー夫人、シュバイツァー博士、などです。冒険家達の伝記は、困難にも負けずに大自然と戦った強靱な精神力と未知の土地へのロマンを感じ、また、どんなに周囲から冷たい扱いをされても、自分の信念を曲げなかったガリレオ・ガリレイの勇気に感動しました。特にキュリー夫人については、ポーランドの寒い冬に暖房代を節約するためコートなどのあらゆる服をかぶりながら、一心に机に向かって勉強したところが印象的でした。当時の私の通信簿は5段階で「あひるの行列」、つま

り、222...。ですから、そんなに一生懸命に勉強をする、ということが、とても不思議でした。同時にまた、自分もいつか、そのように勉強してみたいという憧れもありました。シュバイツァー博士は、若くしてすでに音楽家としての名声を得ていたのに、30歳になった朝、人類の為に奉仕をする、との思いを胸に、医学を学び、医師としてアメリカで人々の救済に当たったのです。

皆さんは、昔の人々の話を読んで何がおもしろいのかと思うかもしれませんが、困難に出会った時の精神力、自分の信念を貫くことの出来た勇氣、目的のために努力してゆくことの美しさ、人々のために喜んで身を捧げる人間愛、などを感じ取れるかもしれませんよ。



図書館には自伝・伝記がたくさんあります



小学校の図書室などで一度は読んだことのある本が「伝記」ではないでしょうか？

偉業を成し遂げた人たちの生き方から、あなたも何か見つけられるかもしれませんね。

大人のための偉人伝
続 大人のための偉人伝
二十世紀を変えた女たち
キュリー夫人伝
ジャンヌ・ダルク
わが生活と思想より
シュヴァイツァー

木原武一
木原武一
安達正勝
エーヴ・キュリー
レジーヌ・ペルヌー他
アルベルト・シュヴァイツァー
ジェームズ・ベントリー

新潮社
新潮社
白水社
白水社
東京書籍
白水社
偕成社



夏休み中の図書館情報

★長期貸し出し★ 一人10冊まで 受付開始7月10日（視聴覚資料は長期貸出しできません）

★休暇中の開館★ 8月12日～23日 9月14日～30日

開館時間等詳しいことは、開館カレンダー、図書館ホームページ等で確認してください。

わたしの好きな作家・本！

『The Little Prince』（星の王子さま）

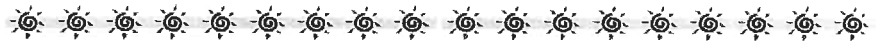
サン＝テグジュペリ著

英米文化学科3年 島崎 真代

サン＝テグジュペリはフランスの作家
「星の王子さま」はフランス語版、英語版、日本語版を所蔵しています。

『Little Prince』とサハラ砂漠の真ん中に不時着してしまったパイロットとの出会いから、『彼』の住む惑星の話しや旅してきた体験談など…、『彼』等は目には見えない大切なものを見つけ出します。そして、大切なものを見つけた『Little Prince』は、静かに眠るように倒れ、自分の星へと還っていきます。

子供から大人まで楽しく読める深い感動の物語を、もう一度読んでみませんか？子供の頃とは違う何か不思議な発見があるはずです。



『嫁してインドに生きる』

タゴール暎子著

芸術文化学科2年 笹田 彩子

「嫁してインドに生きる」はインドの名家へ嫁いだ著者が、大家族制度における習慣、儀式など異文化の日常生活の中で、どのように生きていこうとしたのかを描いた本。
(ちくま文庫 1987年)

タゴール暎子さんは、ごく普通の日本の女子大生でした。が、ひよんな事から出会い、結婚した相手がインド人、それも彼は東洋人として初めてノーベル賞を受賞した詩聖、ラビンドラナート・タゴールの末裔だったのです。今と違い、40年前のインドは日本人にとって遠い遠い地の果てのような国でした。

その中で生活していくうちに直面する、インドの伝統や生活習慣の違い、細かなそこで生活した人しか解らないような事、娘の誕生、ベンガルの子守歌やお食い初めの儀式、嫁と姑の関係、詩聖タゴールについて、貧しい人々の暮らし振りなど、インドの文化の

魅力的なところが沢山紹介されています。また、一人の日本の女性であるタゴール暎子さんが、初めはお国柄の違いにとまどいながらも、徐々に「インド化」して、立派なインドの母さんになっていく様子も面白いです。

私はこの本に中学生の時に会いました。インドの暮らしや自然、ガンジス川の流れなどが目に浮かび、すっかりインドにいるつもりになって夢中で読みました。

この本を読んでいると、世界は本当に広いなあ、という楽しく大きな気持ちになってきます。毎日の生活がどうもマンネリだな、と思ったらぜひ手にとって読んでみてください。

図書館委員会の先生ご紹介

図書館は、館長はじめ委員会の先生方と協力して運営しています

図書館長
杉浦太一先生



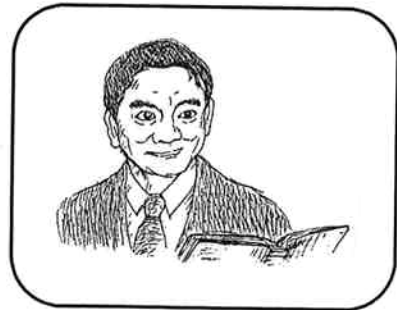
下川学先生



本を読むことも、体を動かすことも非常に重要なことです。
大学の施設を有効に利用しましょう。

Ramon Fargas先生

Great ideas and inspirations come when we read, think, and spend moments studying in silence. The library is probably the best place in the college where one can do all these at the same time. I hope students realize and take more advantage of this wonderful privilege available to them.



藤原章雄先生



佐野さんが描いて下さった似顔絵(Brava!)の衣裳はモーツァルトの時代の貴族の衣裳です。オペラでは「ドン・ジョヴァンニ」「魔笛」「コシ・ファン・トゥッテ」等。これらの作品はビデオやレーザーディスクで楽しむ事が出来ます。又今回ワールド・カップで日本のサポーターが歌っていた応援歌はオペラ「アイーダ」の行進曲の一フレーズです。私達の身近な所にオペラの中の名旋律が使われている事が多々あります。上記のオペラその他、私の薦める作品は「カルメン」「椿姫」「トゥーランドット」などがあります。

皆様の御来場をお待ちしています。